

# ROUND ABOUT JOURNAL vol.1 「オルタナティブ・メディア」は必要か?

私たちが休日を送じてオルタナティブ・メディアを作成する理由はただ「議論したい」というシングルな動機に尽きるが、「そもそも議論することの意味がわからない」という若い世代の反応も多い。今、我が国の社会からは「議論し、ものをつくる」というロールモデルが失われているのではないか。ゆえに問う。「オルタナティブ・メディアは必要か?」



## 始めるはじ、変えるはじ、続けるはじ 五十嵐太郎インタビュー

INTERVIEW with Taro Igarashi

web



伝説的な自主制作誌「エアフィカート」から「10+」「トンチク」「建築雑誌」に至るまで、様々なメディアの制作に関わってきた五十嵐太郎氏に話を伺いつつ、私たちの活動のあり方を考えてみた。

## Round About Journal

連載

### 「建築雑誌」ジャック

01

#### チーム・ラウンド・アバウト

伝説的な自主制作誌「エアフィカート」から「10+」「トンチク」「建築雑誌」に至るまで、様々なメディアの制作に関わってきた五十嵐太郎氏に話を伺いつつ、私たちの活動のあり方を考えてみた。

**五十嵐太郎** いつもお世話になります。私は東京大学で建築を専攻して卒業後、東京理科大の菊地宏さんと一緒に「SHUMAI」という毎週お題を出して即日設計を行なう勉強会でした。東大でも情報が集まる本郷ではなく、駒場にいたので、自分から動かないで埋もれてしまうと考へていました。

**藤村** 「エアフィカート」を始めたきっかけはどうなものだったのでしょうか。

**五十嵐** あれは南條裕智と太田浩史君が始めたのですが、よくありがちだけ1号出したところで潰れそぞつだったので、僕が建て直して軌道にのりました。東大でも情報が集まる本郷ではなく、駒場にいたので、自分から動かないで埋もれてしまうと考へていました。

**藤村** 「エアフィカート」の特徴は、歴史人と原研の意匠系う人の組み合わせだったことです。一般的な知のモードも、脱機械主義的な哲学からアーティルドワーカー的な社会学にシフトしました。しかし、これで現代思想を読むみたいな雰囲気になりましたね。最近の院生は、昔に比べて貴重紙をどんどん書かないといけないの少年ジャンルのようなガイドを作ったんですね。記録的な分厚さでした。

**藤村** そのとき、既存のメディアとの関係はどんな感じだったんでしょうか。

**五十嵐** 院生が直接書く機会があまりないというか、距離が遠くなっていたから、自分たちで個人誌を作りました。ただ、それでも当時は「SD」の「海外建築情報」や、「建築文化」で「OVERSEAS NOW」という、若手が好きなように書いていい解放的なページがあったんですね。雑誌の一部にオルタナティブ・メディアが埋め込まれているような感じでした。

**藤村** その当時、五十嵐さんからみて、前例やモデルにされていた学生主体のメディアは何かあつたんですか。

**五十嵐** 当時、中谷れいさんが関わって、「A」っていう雑誌が早稲田で出ていて、その1号は編集を放棄しているようなところがあつて面白かったりも繰り返していましたね。タフロイドの形式を選ばれた理由はありましたか?

**五十嵐** 単純にお金と時間がなかつたことです

た。作っている側は透明なジーハル袋だけ用意して、例えば「〇〇部刷るんだったら各音響者が「〇〇部コピーもつてきて入れるんですね。」らしいのようなライカルなスタイルです。そういう意味では同世代の横の動きは意識しました。

**藤村** 私たちが大学院にいた頃、「エアフィカート」が伝説的だったこともあり、「勉強会」なるものにある種の憧れがあつたんですけども、いくらやろうとしても縋からなかつた、という苦い経験があります。代わりに流行っていたのが当時東京理科大の菊地宏さんのグループがやっていた「SHUMAI」という毎週お題を出して即日設計を行なう勉強会でした。五十嵐さんたちの世代が理論と実践のアリッジを試みていらしたのに対し、その下の世代は設計論やコンペの戦略論といったアウトプットが重要視されていることにについては、どう思われますか。

**五十嵐** 「エアフィカート」の特徴は、歴史人と原研の意匠系う人の組み合わせだったことです。一般的な知のモードも、脱機械主義的な哲学からアーティルドワーカー的な社会学にシフトしました。しかし、これで現代思想を読むみたいな雰囲気になりましたね。最近の院生は、昔に比べて貴重紙をどんどん書かないといけないの少年ジャンルのようなガイドを作ったんですね。記録的な分厚さでした。

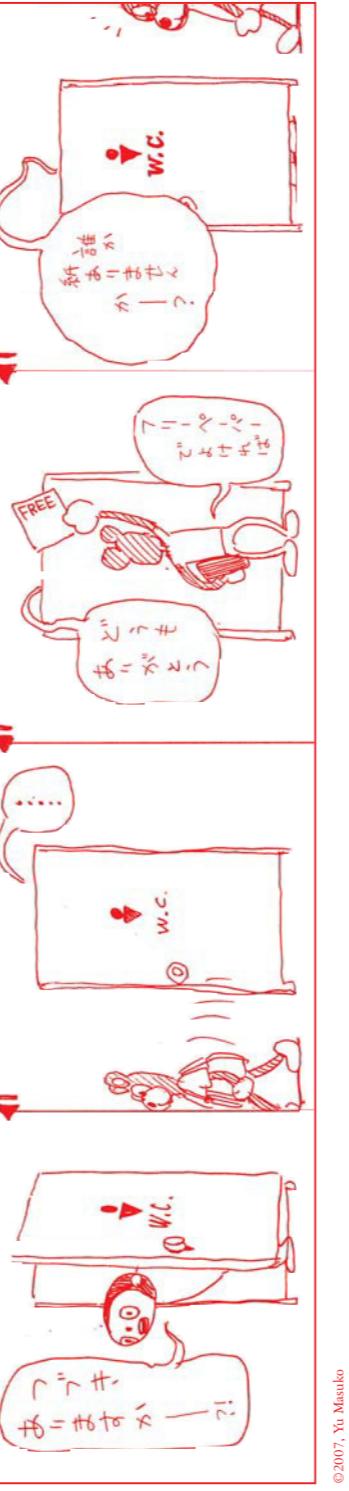
**藤村** なるほど。そういう環境から今度は「10+1」の活動につながつていたということですね。その後、名古屋で学生の活動をオーナナイズされていますね?

**五十嵐** 一名古屋がユニコトだったのは、ギャラリーや本屋のあるビルで、学生が運営するカフェを中心で活動していくことです。僕のアイディアで軌道に乗つたのは「アーティルドワーカー」のシリーズですね。往復の交通費と宿泊費さえ何とかすれば、若手ならレクチャーセミナーに応じてくれると助言したことから始まりました。「FLAT」いうアーティルドワーカーも継続していますね。

**藤村** 東北大に移られたあと、「トンチク」を出されましたね。タフロイドの形式を選ばれた理由はありましたか?

**五十嵐** 単純にお金と時間がなかつたことです

024



©2007, Yu Matsuko

本ページでは、建築都市系のフリーペーパー等を製作しているグループに『建築雑誌』を乗っ取ってもらい、様々な活動を紹介していく。今回取り上げる『ROUND ABOUT JOURNAL』は、設計事務所等に勤務するメンバーによって「議論の場を設計する」を合い言葉に製作されるフリーペーパーである。2007年3月に第1弾(vol.1+2)を、12月に第2弾(vol.3)をそれぞれ発行した。編集=藤村龍至+山崎泰寛、編集協力=伊庭野大輔+藤井亮介+松島潤平+本瀬あゆみ+刈谷悠三、発行部数5,000部。(藤村龍至)

まけなのです。しかし、どんな組織もそうでしょうが、会員数があるスケールを超えたところでもタフロイドは最小限の労力でつくれますしね。阿部仁史さんのパーティ会場で、新聞配達の少年のように「トンチク」を配つたのですが、コミュニケーションの手法としても効果的でした。

**藤村** 今回、五十嵐さんは『建築雑誌』の編集を担当されることになったわけですが、一年間を通してこういったことをやってみたい、っていうのはありますか?

**五十嵐** まずは変えること、記憶に残ることが目的ですね。自分で書きたいことは他の媒体でもできますからね。むしろ、学会誌ならではの建築の専門を横断するような特集、またに「雑誌」。考えてみると、建築自体がいろいろな技術をねらねる雑誌的な志向をもつていますよね。また1月号の「建築雑誌は必要か?」もそうですが、啓蒙的に「これを知りなさい」というよりも、論争を呼ぶ問題を提示し、「テーマ自体を疑いながらやる」という方法は演奏低音になるかも知れません。そのせいか、五十嵐委員会は毎回異常に時間がかかるのです。

**伊藤野** 「変える」というのは、今の『建築雑誌』が良くないと感じていらっしゃるということです。

**五十嵐** いや、まだまだ掘り起こせる可能性があるというのです。ただ、三万五千部を発行する『建築雑誌』は、部数的としては専門誌のスケールを超えていて、専門誌であれという引き裂かれた命題がそこでもありますよね。

**藤井** 「三万五千部」についてどうコメントに対して何か感想はありますか。

**五十嵐** 読みやすくなる工夫はいろいろ試みるとしても、全会員が全ページを執筆するのが目標だとすれば、基本的には勝ち目がない戦いであります。でもます今期は大衆主義を解体して、読むじかんを増やすことを試みます。

『建築雑誌』に限らず、いわゆる「学会誌」の起源を考えると、会員同士の情報交換がそもそもの目的だから、ニュースレターみたいなものから始まっているわけですね。本来は後にある情報ページの方が先で、前にある特集のほうがお

本派』「フリーペーパーとかローカルなものでコミュニケーションを引つ張つてもらったりがあるけど、『トンチク』だと仙台の学生や建築家とか、そういう人たちのアウトプットになっている部分に対する個人的に結構喜んでやうですね。

**五十嵐** やはり、フリーペーパーはコミュニケーションのマイナリティの声を表現するメディアなんじゃないですか? 実際は書いた内容よりも、そのときに得た人のネットワークが後で役に立つと思いますね。僕もそうした場を通じて、初めて同世代の建築家たちと出会いました。

**松島** 外部の人間にアートワークされることはないですか。

**五十嵐** すぐ外部にアートワークするなら、もつと社会ネットにダイレクトに関わるアーティスト的なアーティストが必要ですよ。建築の内輪詰じや外部の人は読まない。ただ、『建築雑誌』はそもそも書店売りをしないメディアだから、もともと読み手が限定されていますね。特集の良し悪しが売り上げによって評価されることもない。だから、ぶれずに制作できる長所と時代に鍛錬がありえるという短所の両方があります。

**藤村** その意味ではオルタナティブ・メディアは、基本的に「自分が議論したくて巷で議論されていない」と思ふことをやればいいと思いますね。

**五十嵐** RAJは五千部も届つたんですけど、普通の建築雑誌よりも多いです。部数だけ見ると、もはや建築界では「オルタナティブ」ではないよね(笑)。

**藤村** では、最後にオルタナティブな活動を志す若い世代にメッセージをお願いします。

**五十嵐** 「続けて下さい」ということです。アーティストでも何でもそうですけど、「続ける」というのが一番難しいですからね。